『夜の寝覚』の「気高し」考

――物語を展開させる中の君の欠点――

池田彩音

一　「気高し」の欠如した中の君

『夜の寝覚』は、中の君[1]という一人の女性を中心人物として描く物語である。『無名草子』に、「はじめより、ただ、人ひとりのことにて、散る心もなく、しめじめとあはれに、心入りて作り出でけむほど思ひやられて、」（二二四頁[2]）とあることから、中間欠巻部や末尾欠巻部においても、中の君が一貫して物語の中心人物であったと推定される。

それでは、『無名草子』が「心入りて作り出でけむ」と注目した『夜の寝覚』の工夫とは、どのようなものであっただろうか。これを考える際、女性を中心人物として物語を展開させていく難しさへの留意が必要であろう。横井孝氏の論では、次のように注意を促している。

いま、『寝覚物語』の〈主人公〉を寝覚の上とすることに異議をはさむ余地はない。だが、古来の「物語」が、超人的な美質を備えた〈男主人公〉を設定することによって紡がれていった事実、―例えば、『源氏物語』の長篇化は光源氏なくしてありえなかったこと、さらに『寝覚』の周辺でも、『狭衣物語』『浜松中納言物語』など、いずれも〈男の物語〉と称すべき物語史的展望のもとに俯瞰しうる事実を思いみるべきであろう[3]。

『夜の寝覚』が女性を中心人物に据えたことは、物語史を見渡してみても特異である。物語の中心人物は多く男性であった。この背景には、男性と女性の行動の範囲の差も関わっていると考えられる。男性は公私にわたって幅広い交流を持つ。一方、家にいる女性は交流も限られてくる。女性を中心人物とする場合、物語を進展させる事件も容易には起こりえない。したがって、男性が中心人物となって展開していく物語とは別の方法が、『夜の寝覚』には用いられていると考えることができる。

一人の女性を中心人物に据えて物語を展開させる時、その造型にも何らかの工夫がなされているのではないか。これについて考える上で、次の父入道の言葉は示唆的である。父入道が中の君の娘の石山の姫君と対面し、中の君の幼い頃からの印象を語る場面を取り上げる。

「……母君をこそ、我が女（むすめ）とも言はじ、世に類なき一つ物と、幼くより見しを、かれ〔中の君※稿者注。以下同じ。〕はせちに愛敬づき、うつくしくにほひ過ぎたまへるほどに、気高きかたや、ただすこし後れたる心地すると見るを、これ〔石山の姫君〕は、今から、かばかりきびはなる御程に、いと気高く、うち見むにただ人とはおぼえず、かたじけなきさまさへ添ひたまひつるを。かかる人の、また世に出でおはする世にこそありけれ」　（『夜の寝覚』巻五・四六九頁[4]）

父入道は、「世に類なき一つ物と、幼くより見し」と語るように、中の君が幼い頃から、その美貌と才能を評価してきた。しかし、石山の姫君との対面に至り、傍線部「気高きかたや、ただすこし後れたる心地すると見る」と、わざわざ中の君の「気高」さが劣ると語る。一方、石山の姫君については「気高」さを第一に評価している。石山の姫君を評価するためとはいえ、なぜこの場面で中の君の欠点として「気高し」が劣ることが語られるのだろうか。

永井和子氏は、当該箇所を引き、「石山の姫君にくらべて中の君は気品に乏しい、との記述は注目に値する。[5]」としながら、物語第一部での中の君の「にほひ」多き描写を例示し、次のように論じている。

以上のように「にほふ」がごとき、豊かにして健康な、生き生きとした美貌を持つ女人として描かれていることを改めて指摘したい。このことは一人の女性に多くの男性を配して動かす物語の必然であるが、他の物語のごとき逆の関係、即ち一人の男性に多くの女性を配する場合の男性の造型―例えば光源氏―のようなわけにはいかず、またかぐや姫のような拒否的存在ともなり得ない。必然的に一方で軽さ・浮薄・色ごのみにつながる危うい部分を内包し、中の君はこのことによって恥の意識を濃厚に抱え込まざるを得ず、「人目」を異常に気にし、また他からの批判を極端に恐れる。

永井氏の指摘は、中の君の美貌と、それに付随する負の側面が、「一人の女性に多くの男性を配して動かす物語の必然」であり、一方で中の君の内面にも働きかけるものとする点で的を射ていると言えよう。しかしながら、そのような見通しを立てるにあたって、「気高し」については検討がなされていない。父入道の言葉において、中の君の「にほひ」多き女性としての魅力を強調するためだけなら、「気高し」について言及する必要はないのではな

いか。中の君の負の側面として「気高」さの乏しさが特に語られることについては、より詳細な検討が必要ではないだろうか。

本稿では、中の君に対して「気高し」が劣るとされる意味を明らかにする。加えて、『源氏物語』の女三の宮の「気高し」の用い方との影響関係についても考察し、中の君の造型における「気高し」の欠如の果たした機能について提示する。

二　「気高し」による評価

まず、『夜の寝覚』における「気高し」の特徴について、特に女性に対する評価の用例を中心に確認する。

『夜の寝覚』の「気高し」は二十一例ある。「気高し」を備えているとされる人物は、大君（六例）、帝（四例）、女一の宮（三例）、男君・中宮・宰相中将の上〔故関白の次女〕・新中納言〔中の君の次兄〕・石山の姫君（各一例）の八名（計十八例）である。残りの三例は、中の君と大皇の宮について、それぞれ「気高し」を打ち消しの形で用いたり、欠如を語る文脈で用いたりするものである。

「気高し」が用いられるのは、それぞれ皇族、源氏太政大臣家、関白家といった、高貴な出自を持つ人物である。中でも、中の君の姉である大君に最も多くの用例が見られることは注目に値する。

大君は、物語登場当初から「気高し」とされる女性であった。

大君は、琵琶を、御かたちはきよらに、いと気高くて、おほのかなるものの音をゆるるかにおもしろく掻き鳴らし、中の君は、幼く小さき御程に、今宵の月の光にも劣るまじきさまして、箏の琴を弾きたまふ。　（『夜の寝覚』巻一・一七頁）

これは、大君と中の君の容姿が初めて形容される場面である。大君は太政大臣の娘という高貴な出自に相応しく、気品のある美しさを持った女性であるとされている。一方、中の君には「気高し」という語は用いられない。こうした大君と中の君の対比は繰り返し語られており、大君の「気高」さを挙げた後には中の君のことにも必ず言及がある。

〔大君は〕頭つき、様体いときよげにて、あざやかに気高く、きよらなるかたち、もてなし、有様も、心恥づかしげに、よしある気色ぞ、人にことなる。「人の御程、かたち、これこそ限りなき際なれ。〔中の君の〕面影は、などて、さは様ことにすぐれしぞ」と、まづあやしきまで思ひ出でらる。

（『夜の寝覚』巻一・五五頁）

右に掲げたのは、男君が大君と結婚した後、初めて大君の姿を昼に見た場面である。男君は、大君の身分や容貌について、最上級のものだと評価している。だが、男君は目の前の大君よりも、中の君の面影を思い出しているのである。『夜の寝覚』は、大君を

「気高」い女性と印象づける一方で、中の君を「気高し」と対比的に印象づけようとしていると考えられる。

物語第三部では、男君によって妻の女一の宮と中の君が比較される場面で、「気高し」が対比的に用いられている。

これ〔女一の宮〕を、悪うおはしますとおぼゆるにはあらず、気高く、きよらかに、うるはしう、あてなる御けはひ、有様、「かうこそは、帝の御女はおはすべけれ」と、限りなく見たてまつりながら、「〔中の君から〕うち退きて、年ごろ隔てつるをりは、おのづからうち紛れけり。かやうに、いと気高く、静やかにはあらず、いとまことにうつくしう、たをやかなるけはひ、有様の、似るものなきはや」と、うち思ひくらぶるに、心地うち騒ぎて、（『夜の寝覚』巻四・三四二頁）

女一の宮は、傍線部「気高く、きよらかに、うるはしう、あてなる御けはひ、有様」が皇女らしいと評価されている。[6] 大君と同様、高貴な出自に相応しい様子が好ましく捉えられている。それに対して、中の君は、「気高」さについて女一の宮と比べて否定的に語られている。

このように、「気高し」は高貴な出自を持つ人物に用いられ、その出自に相応しい気品のある様子を評価する言葉である。だがその一方で、繰り返し中の君と対比されることも、「気高し」の特徴の一つである。現存部分を見る限り、中の君は一貫して「気高し」という語をあえて避けて描かれていると言える。

ちなみに、『源氏物語』では明石の君に「気高し」が用いられており、出自の低さを個人の性質によって補おうとする意識が窺える。それに比べて、出自の同じ大君と中の君に「気高し」の有無の差があるのは、中の君個人の性質に原因があるからだと考えられる。

三　「気高し」と対比される中の君の魅力

中の君には、「気高し」という評価が用いられない。それでは、「気高し」と対比されることによって浮かび上がる、中の君の性質とはどのようなものであろうか。

次に掲げるのは、女房による大君と中の君の比較である。

中納言の上〔大君〕は、いと気高く、もの遠きさまして、御けはひもうるはしく重りかにのみおはすれば、うちとけがたきものに、女房などもみなつつみきこえて、この君〔中の君〕は、け近くもらうたげにもおはすれば、つかうまつるも、いとさぶらひよくのみならひたるに、

（『夜の寝覚』巻一・六二頁）

中の君は、傍線部「け近くもらうたげにも」と、親しみやすさやかわいらしさが特徴で、女房からお仕えしやすいと思われてい

る。一方大君は、破線部「いと気高く、もの遠きさまして」とされている。ここでは、「気高し」とともに「もの遠きさま」や「うちとけがたきものに、女房などもみなつつみきこえて」と、大君の近づきにくさや親しみにくさが描かれている。

『夜の寝覚』には「気高し」と「もの遠し」が続けて用いられる例が、あと二つある。一例は男君に、もう一例は大皇の宮に否定的に用いられている。

〔男君の〕御様、かたちは、めでたくきよらになまめきて、人を、なべては、さらに見入れ馴らしたまはず、気高く、もの遠き御有様に、〔但馬守三女を〕わざと見入れたまひて、事にふれて、なつかしくおぼしおきてたまふ。

（『夜の寝覚』巻一・六七頁）

〔大皇の宮は〕親と申しながらも、ものにいと気高く、もの遠くはおはしまさず、いとけ近う、わららかにのみおはしますに、〔帝は〕すこしうちとけて、

（『夜の寝覚』巻三・二五〇頁）

「気高し」は近寄りがたさや親しみにくさを感じさせる性質として、「なつかし」や「け近し」と対比的に用いられている。「気高し」は、単に気品の高さを表わすだけではなく、目下の者を近寄らせないような性質を表わす語だと考えられる。

さらに、中の君は中宮の「気高」さとも比較されている。中宮のもとに仕える新少将によって、中宮と中の君が対比的に語られる場面を引用する。

〔中宮は〕いと気高う、にぎははしき御様限りなけれど、源氏の大殿の中の君の御かたちのなつかしさには、え並ばせたまふまじかめり。

（『夜の寝覚』巻一・六八頁）

中宮の「気高」さとは対比的に、中の君の「なつかしさ」が優れていることが示されている。男女問わず、周囲の人物を惹きつける中の君の「なつかしさ」は、他の女性たちにはない魅力である。しかし、中宮のような、身分の高さによって裏打ちされた華やかさと、中の君の親しみやすさが対比的に描かれていることは示唆的である。中の君の魅力は、中宮のように身分の重さや華やかさを得るには繋がっていない。

中の君の「なつかしさ」を考える上で、帝による中の君の評価は注目できる。帝が初めて中の君を垣間見た場面を挙げる。

〔中の君の〕たをたをと、なつかしくなまめきたるさまなど、「長恨歌の后の、高殿より通ひたりけむかたちも、うるはしうきよげにこそありけめ、いとかう、愛敬こぼれてうつくしうにほひたるさまは、えこれ〔中の君〕に及ばざりけむ」とぞ、おぼし知らるる。

（『夜の寝覚』巻三・二五四頁）

傍線部「たをたをと、なつかしくなまめきたるさま」という中の君の魅力的な姿について、破線部「愛敬こぼれてうつくしうにほひたるさま」が「長恨歌の后」すら及ばないほど卓越していると帝は語る。ここで、中の君の「気高し」の欠如が父入道に語られる場面を再び掲げ、中の君の特徴を確認する。

かれはせちに愛敬づき、うつくしくにほひ過ぎたまへるほどに、気高きかたや、ただすこし後れたる心地すると見るを、

（『夜の寝覚』巻五・四六九頁）

「せちに愛敬づき、うつくしくにほひ過ぎたまへる」という表現は、破線部「愛敬こぼれてうつくしうにほひたるさま」と、ほとんど一致している。「気高し」の欠如とともに語られた中の君の特徴は、人を惹きつける魅力と通うものであった。

帝は人を惹きつけてやまない中の君の魅力について、次のようにも語る。

「……〔中の君の〕かばかりのさまを、兄姉（はらから）のかたはらにありけむに、ほのかにも見聞いて、いかでか人のやすくもあらむ。心ならで、かならず、この人の名は今も立ちなむ。……」

（『夜の寝覚』巻三・二五八―二五九頁）

兄姉しか中の君の傍にいないような状況ならば、中の君の美しさを見聞きした人は、心穏やかではいられず、必ずや中の君の浮名が立ってしまうであろうという。意図せず人を惑わしてしまうほどに、中の君の魅力は強調されている。実際、この後帝は中の君に言い寄り、中の君は帝との噂を流されてしまう。

中の君は、帝をも魅了してやまない女性である。「気高し」と対比されることで強調される「なつかしさ」は、他者を惹きつけ、その人物を衝動的に動かしてしまうという力を持つ。この性質は、中の君にとって協力者を得るのに有利にも働く一方で、思わぬ男性関係に巻き込まれてしまうような、危うい状況をも招くものであった。

四　入内を期待させる「気高し」

中の君が「気高し」と対比的に描かれるのは、「気高し」の持つ人を寄せつけないという性質を中の君から遠ざけ、代わりに人を惹きつけてやまない「なつかしさ」を強調し、物語を展開させるためだと考えられる。

それでは、中の君との関係において、石山の姫君が「気高し」と評価されるのはなぜだろうか。物語は中の君の「気高し」と対比的な様子を、他の女君との比較においては否定的には語らず、むしろ中の君の優れたさまを強調してきた。ここに至ってその姿勢を崩し、中の君の欠点を語るのは、物語が転換点を迎えたことを示すのではないか。

男君が中の君の父入道に対して、石山の姫君が中の君との間に生れた娘であったことなどを告白した際、石山の姫君の将来について言及する場面を掲げる。

「……〔石山の姫君は〕やうやうおよすけまかる年ごろに、いま一つ二つの年も加はりはべりなば、後の宿世は知らず、宮仕へにも出だしたてむと思ひたまへ掟てたるに、限りなき心ざしはべれど、男は限りはべり。……」

（『夜の寝覚』巻五・四五七頁）

この時石山の姫君は十一歳である。男君は、あと一、二年もすれば石山の姫君を宮仕えに出そうと考えているという。さらに、中の君の父入道も、石山の姫君の入内への期待を語る。

「この御母君〔中の君〕を、いみじくかなしく思ひきこえしかど、そは心やすかりけり。これ〔石山の姫君〕は、いと殊にめづらしく、母君の御契りの思ひしよりは口惜しく、我も雲居までは思ひ寄りきこえずなりにしがいと胸痛き代はりに、この御有様をだに、本意のごとく見聞きたてまつるまでの命は惜しく」ぞおぼさるるや。

（『夜の寝覚』巻五・四九七―四九八頁）

父入道にとって、中の君が入内しなかったことは惜しまれる点であった。大君の将来を考えた時には、帝の中宮への寵愛の厚さや、東宮の幼さのため、入内は選択肢から外されていた。その後、帝から中の君の入内が求められた際、父入道は「はかばかしき後見なし」（『夜の寝覚』巻三・二五九頁）と言い、これを固辞している。中間欠巻部に当たるため、詳細は不明であるが、中の君と男君との間に噂があったのを苦慮しての判断であったのだろう。父入道が中の君と石山の姫君を比較するのは、中の君よりも石山の姫君が入内するに相応しい点を見出し、入内が実現する確信を得るためではないだろうか。入内するに相応しいと確信できる要素が、中の君と石山の姫君に対照的に用いられた「気高し」だったと考えることができる。

これまでにも、『夜の寝覚』において、「気高し」は入内に相応しい女性の特徴としても用いられていた。大君は実際には入内しなかったものの、父入道は大君の結婚を考える際にまず入内の可能性について検討していた。また、「気高し」は中宮の特徴でもあった。

その上、中の君の夫の故関白の次女は、「気高し」が特徴である。故関白の次女は、「あるが中に、殿〔故関白〕のやむごとなく心ざしたまひけむ」（『夜の寝覚』巻五・五二〇頁）とあるように、三人の娘の中でも最も期待をかけられていた。次女は「いとあてに気高く、ものきよげなる御かたち、もてなし、用意いと静かに、心にくきさまは、これしもすぐれたまへる」（『夜の寝覚』巻四・三四八―三四九頁）と語られ、気品がある容貌、落ち着い

た物腰、奥ゆかしい様子が優れていたという。参考として中村本を挙げると、「十三になり給ふ〔次女〕をば、東宮にと思したり。」（巻三・二六四頁）[7]、「この君〔次女〕をば、けだかくいみじきさまし給へるとて、内へ奉らんとのたまひしかど、」（巻四・二九五頁）とある。次女は東宮への入内が期待されていたと推定できる。

後に中の君と間違われて宮の宰相中将に盗まれてしまうため、次女の入内は実現しないものの、「気高し」という性質を備えた女性が格別に入内への期待をかけられていることは注目に値する。中の君があえて「気高さ」を避けて描かれるのは、入内し、后となって栄華を極めるというような筋ではなく、中の君の苦悩をひたすら描くという物語の構成にも関わっているのではないだろうか。

現存部では記述がないものの、末尾欠巻部において石山の姫君の入内は果たされたようである。『風葉和歌集』には、中の君の父入道の七十の賀の際、中宮の行啓があったという記述がある。

七十のよはひを娘の賀し侍りける時、中宮行啓など侍りけるによみ侍りける　寝覚の入道太政大臣

今はとて戸ぼそ閉ぢてし草の庵にさやけき空の光をぞ見る

（『風葉和歌集』巻第十八　雑三　一四〇八）[8]

入道の七十の賀で、「草の庵」まで中宮が行啓するということは、入道の期待通り、石山の姫君が中宮になったことを示していると考えられる。さらに、『無名草子』では、立后と立太子が一度に行われた際、中の君がその感慨を詠む記事が取り上げられている。

また、后の宮、東宮など一度に立ちたまふ折、中の上ゐざり出でて、

寝覚めせし昔のこともわすられて今日の円居にゆく心かな

と言はれたるほど、いと憎し。　（『無名草子』一三二頁）

ここで東宮となったと考えられるのは、現存巻五の終盤に中の君の義理の娘が産んだ皇子である。娘や、義理ではあるが孫といった身内の者が、中宮や東宮になったからこその感慨が、ここでは表わされているのだろう。これらの資料から、石山の姫君は実際に中宮となったと推定できる。

中の君は、最も事実を知られたくなかった父入道に、石山の姫君との関係が知られたのを契機として、「気高し」の欠如が欠点であるとされる。中の君の欠点は、「気高し」を備えた石山の姫君の存在によって補われ、中の君は「中宮の母」という身分の重さや栄華に近づく。現存部では確認できないが、「気高し」という語を鍵として物語がさらに続いていくことを、中の君と石山の姫君の比較は暗示していると考えられる。

五　「気高し」欠如の先蹤――『源氏物語』から――

ところで、『夜の寝覚』の「気高し」と「なつかし」の対比関係は徹底して描かれている。これは、『夜の寝覚』が特に意図した点であったと考えることができる。なぜなら、『夜の寝覚』が影響を受けているとされる『源氏物語』においては、「気高し」と「なつかし」を兼ね備える人物が描かれているからである。次に挙げるのは、『源氏物語』の宇治の中の君が姉大君について語る場面である。

かれ〔宇治の大君〕は、限りなくあてに気高きものから、なつかしうなよよかに、かたはなるまで、なよなよとたわみたるさまのしたまへりしにこそ、……　（東屋巻・⑥七三頁）[9]

根来司氏は、この『源氏物語』の用例を挙げ、「思うに『なつかし』と『け高し』を両立させることはむずかしくても、これを両立させるのが平安朝の理想の形ではなかったか。[10]」と、「なつかし」と「気高し」を兼ね備える意義を指摘している。

『夜の寝覚』の中の君は、物語中さまざまな人物から優れた人物であると語られる。しかし、『源氏物語』で理想とされたような「気高し」と「なつかし」を兼ね備える人物には描かれなかった。これは、柏木が女三の宮に初めて忍び寄った場面において、女三の宮の「気高し」を否定的に語ったことを踏まえるのではないだろうか。

〔女三の宮は〕いとさばかり気高う恥づかしげにはあらで、なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひの、あてにいみじく思ゆることぞ、人に似させたまはざりける。さかしく思ひしづむる心も失せて、いづちもいづちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えてやみなばやとまで思ひ乱れぬ。

（若菜下巻・④二二五―二二六頁）

女三の宮は、皇女という高い身分にもかかわらず、傍線部「いとさばかり気高う恥づかしげにはあらで」と、柏木の視点から捉えられる。破線部「なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひの、あてにいみじく思ゆる」ことが、女三の宮の特徴であるという。柏木は女三の宮を間近に見て、女三の宮への欲望を押さえきれなくなり、ついに密通へと至ってしまう。

この場面について、榎本正純氏は、「つまり、かの女の『けたか』さの欠落と『あて』なる物腰が柏木の情念に火をつけたのだと物語は言いたげなのである[11]」と論じている。女三の宮の性質を柏木の視点から語る際、「気高さ」ではなく「あて」が意図的に選び取られているのである。その結果、物語は柏木を衝動的に動かし、密通という展開を導き出している。

女三の宮は「気高」い性質を否定され、「なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひ」、つまり親しみやすく、かわいらしく、なよなよとした優美なさまが描かれている。このような造型は、近寄りがたさを感じさせず、他者を惹きつける。前に見たように、『夜の寝覚』の中の君は常に「気高」い女性と比較されながら、女三の宮のように、「なつかしくらうたげ」な様子が何度も言及されていた。これは、女三の宮の描き方を『夜の寝覚』が踏まえ、物語を展開させる方法として意識的に用いたためと考えられるのではないか。

『源氏物語』には、「気高し」は四十五例ある。その中で、女三の宮だけではなく、夕顔、浮舟についても「気高し」と対比的な表現が見える。この二人の女君の「気高し」と「なつかし」の用い方についても検討を加えておく。

夕顔は、生前仕えていた右近から、娘の玉鬘と対比的に回想される。

母君は、ただいと若やかにおほどかにて、やはやはとぞたをやぎたまへりし、これは気高く、もてなしなど恥づかしげに、よしめきたまへり。（玉鬘巻・③一一七頁）

母と娘が「気高し」について対比的に語られるという点では、中の君と石山の姫君についての入道の言葉に近いものがある。しかしながら、「気高し」との対比によって夕顔の「なつかしさ」が強調されているわけではない。玉鬘は父の血筋を受け継いでいることで、母にはなかった「気高」さがある。夕顔と玉鬘の「気高し」の有無の差は、その出自の差を物語っている。一方、中の君は同じ両親から生まれた大君との間に「気高し」の有無の差があり、『夜の寝覚』では出自の差よりも、その親しみやすさ、近づきやすさに描き分けの重点が置かれている。身分の大きく異なる夕顔と中の君では、同じ母娘の対比という文脈でも、「気高し」と対比されることの意味合いが異なるのである。

浮舟の物語を、「気高し」の用例を中心に簡単に見通すとすれば、母中将の君による「気高し」への渇望から、「気高」い匂宮や薫との関係を持ち、「気高」くない出自ゆえに死を決意した女君の物語を描くことができる。つまり、中将の君から、「面だたしう気高きことをせん」（東屋巻・⑥二三頁）と、「気高」い男君との縁組を望まれ、その結果として薫や匂宮との関係に悩むようになった浮舟は死を決意する。その時に語り手から、「児めきおほどかに、たをたをと見ゆれど、気高う世のありさまをも知る方少なくて生ほしたてたる人にしあれば、すこしおずかるべきことを思ひ寄るなりけむかし。」（浮舟巻・⑥一八五頁）と、その出自の低さが死の決意につながったとされる[12]。

これらの用例を見ても、「気高し」との対比が「なつかし」を強調するような用いられ方をしているものはない。それは、浮舟に「なつかし」が用いられる例を見ても明らかである。

紛るることなくのどけき春の日に、〔匂宮は浮舟を〕見れども見れども飽かず、そのことぞとおぼゆる隈なく、愛敬づき、なつかしくをかしげなり。さるは、かの対の御方〔宇治の中の君〕には劣りたり、大殿の君〔夕霧の六の君〕の盛りににほひたまへるあたりにては、こよなかるべきほどの人を、たぐひなう思さるるほどなれば、また知らずをかしとのみ見たまふ。

（浮舟巻・⑥一三二頁）

匂宮は、浮舟を「なつかしくをかしげ」と見る。それに対して語り手は、宇治の中の君や夕霧の六の君と比べて、実際は劣っているのだとし、浮舟への評価が匂宮の主観に拠ることを指摘する。中の君と六の君は他の場面で「気高し」とされる人物であるものの、匂宮が浮舟と直接比較している訳ではなく、やはり「なつかし」と「気高し」を対比するような描き方にはなっていない。

こうした夕顔や浮舟の場合と比べて、女三の宮は、次の二点で『夜の寝覚』の中の君の描き方と一致している。一点目は、高貴な出自の女君が、本来あるはずの十分な「気高」さを備えていない、とされることである。二点目は、「気高し」の欠如によって、「なつかし」が強調され、他者の衝動的な行動を導き出していることである。以上から、『夜の寝覚』は女三の宮の例を踏まえて「気高し」と「なつかし」の対比関係を綿密に積み上げ、中の君を造型していったと考えることができる。

六　負の側面を抱えた造型の意味

中の君は巻一から一貫して「気高し」と意識的に対比され、人を惹きつけてやまない「なつかしさ」が特徴づけられていた。このことは、『源氏物語』の女三の宮の性質が柏木を密通へと駆り立てたように、中の君の周囲の人物を動かす要因となっている。

このような「気高し」の欠如した中の君の特徴は、石山の姫君との比較において、父入道によって指摘される。石山の姫君は中の君との関係において「気高し」と評価されることで、将来の中宮に相応しい人物であると印象づけられる。「気高し」の劣る中の君は、末尾欠巻部の展開をも導いていく。

本稿では「気高し」に着目し、その影響が女三の宮からのものであると判断した。しかしながら、「気高し」という語から視野を広げ、本来の出自よりも気品が低く見られることに注目すれば、物語第一部において、中の君が男君によって但馬守三女と間違えられたこととの関連性も見過ごせない。

中の君が但馬守三女と間違われたことは、「我ながらあやしく鎮めがたきを、人の程をこよなき劣りと思ふに、あなづらはしく、」（『夜の寝覚』巻一・三〇頁）と、男君に身分的に見くびる気持ちを起こさせ、二人が契りを結ぶ要因の一つとなっている。この場面では「気高し」という語は使われていない。そのため、「気高し」の欠如が直接的に男君に働きかけたとは言えない。だ

が、この二人の出会いの場面には、光源氏と夕顔の出会いの場面が踏まえられていることが指摘されている。[13] さらには、男君との逢瀬を契機に展開する物語第一部には、浮舟からの影響が少なからずあることも、池田和臣氏によって論じられている。[14] 前に見たように、夕顔、浮舟は、「気高し」と対比的に語られる女君であった。

但馬守三女と間違えられた中の君は、夕顔や浮舟のような身分の低い女君として扱われ、男君との関係に巻き込まれることになった。中の君は誤解が解けてもなお、男君をはじめとする男性たちとの関係に翻弄される。「気高し」の欠如は、こうした夕顔や浮舟のような身分の低い女君が辿るに相応しい運命を、高貴な女三の宮の例を引き合いに出しながら、中の君の上に必然的なものとして負わせることに意義があったと考えられる。つまり、出自的に欠点のない中の君に、あえて「気高し」の欠如という欠点を描くことによって、男性関係をめぐる事件を起こしやすくさせ、中の君を中心とする物語に推進力を与えているのである。

注

（1）「中の君」は老関白と結婚する以前の呼称であり、中の君が老関白と結婚してからは「寝覚の上」と呼ばれる。本稿では便宜上、「中の君」という呼称を用いる。

（2）『無名草子』の引用は、久保木哲夫氏『新編日本古典文学全集　無名草子』（小学館、一九九九年）による。以下同じ。なお、「ただ、人ひとり」の解釈については、「ただ人」を一語として扱う解釈もある。しかし、どちらの解釈によっても中の君一人を示すことに変わりはない。

（3）「〈女の物語〉の継承―『寝覚物語』論」（『〈女の物語〉のながれ―古代後期小説史論―』加藤中道館、一九八四年）。

（4）『夜の寝覚』の引用は、鈴木一雄氏『新編日本古典文学全集　夜の寝覚』（小学館、一九九六年）による。以下同じ。傍線等は全て稿者による。

（5）「寝覚物語の方法と表現―「偏った物語」として」（『幻想の平安文学』笠間書院、二〇一八年　初出『国語と国文学』六八―一一、一九九一年十一月）。

（6）女一の宮に皇女らしい「気高さ」があることについて、赤迫照子氏「『夜の寝覚』女一の宮試論―「気高さ」をめぐって―」（『広島女子大国文』二〇、二〇〇五年八月）が着目している。ただし、「気高し」の用例を検討するものではない。

（7）中村本の引用は、鈴木一雄氏・伊藤博氏・石埜敬子氏『中世王朝物語全集　夜寝覚物語』（笠間書院、二〇〇九年）による。以下同じ。

（8）『風葉和歌集』の引用は、樋口芳麻呂氏『王朝物語秀歌選（下）』（岩波書店、一九八九年）による。

（9）『源氏物語』の引用は、阿部秋生氏・秋山虔氏・今井源

衛氏・鈴木日出男氏『新編日本古典文学全集　源氏物語』（小学館、一九九四年―一九九八年）による。分冊を丸囲みの算用数字で頁数の前に示した。以下同じ。傍線等は全て稿者による。

（10）「たけ高き道綱母」（『国語と国文学』五八―六、一九八一年六月）。

（11）「女三宮攷―物語と作者（下）―」（『武庫川国文』三二、一九八八年十一月）。

（12）ただし、浮舟は失踪後、「生きたまひての御宿世はいと気高くおはせし人」（蜻蛉巻・⑥二一三頁）との評価も右近や侍従から受けている。

（13）『新編日本古典文学全集　夜の寝覚』頭注二六頁、赤迫照子氏「『夜の寝覚』における夕顔物語引用の方法―「身分違いの恋」という装い―」（『更級日記の新研究―孝標女の世界を考える』新典社、二〇〇四年）など。

（14）「『源氏物語』の水脈―浮舟物語と『夜の寝覚』―」（『源氏物語　表現構造と水脈』武蔵野書院、二〇〇一年　初出『国語と国文学』六一―一一、一九八四年十一月）。

付記

本稿は、平成二十七年度中古文学会秋季大会（於県立広島大学）での口頭発表「「女主人公」としての中の君―『夜の寝覚』の「気高し」考―」をもとに、大幅に加筆修正したものです。ご教示を賜りました先生方に厚くお礼申し上げます。

（いけだ・あやね　本学大学院博士課程後期課程）